

16世紀イタリアの〈言語問題〉

糟谷啓介

1

15世紀後半、ロレンツォ・デ・メディチ治下のフィレンツェは、俗語による文学活動がそれまでにまして活況を呈した時代として知られる。ポリツィアーノ、プルチなど、メディチ家の庇護をうけた文学者たちがその中心であったが、ロレンツォ自身からして、なかなかの技倆の詩作をものしているほどの、月並みなことばを使えば、文人政治家であった。ところで、そのロレンツォは、なぜ俗語のような品位のないことばで詩を書くのかと問われたとき、ほぼつぎのような内容のことを答えている。

ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョ、その他のフィレンツェの詩人たちが、俗語によって、あらゆる豊かな詩想を甘美な形式で表現したことを見れば、「われわれの言語の品位」は、疑うべくもない。さらに、社会生活に有用なことどもを表現してゆき、より以上の完成をめざすなら、俗語は、フィレンツェ都市国家の繁栄と歩みを共にしつつ、これまでの「青春期」から「成人期」へと成長してゆくであろう。わたしが生まれ育った言語で書いたことは、つぎのことを考えるなら、だれもとがめることはできないはずだ。ヘブライ語も、ギリシャ語も、ラテン語も、それぞれの時代には「生まれながらの母語 (lingue materne e naturali)」であったのであり、ただ、名声と学識をもつ者は、「有象無象の俗衆 (volgo e turba popolare)」よりも、ずっと正確に、規則にしたがって話し書いたのである……⁽ⁱ⁾。

このロレンツォの発言は、俗語にたいする言語意識の変遷において、ひとつの時代を画すものとなっている。俗語/ラテン語の対立をnaturalis/artificialisの対立におきかえて、俗語の顕揚をはかったダンテのような試みは、もはや見られない。かつてはラテン語も、現在の俗語とおなじく〈自然のことば〉であっ

たことを説くことで、ラテン語と俗語との対等性を明らかにすることがめざされる。ある意味で、これは、ユマニズムがその歴史文献学の方法によってラテン語を歴史的遠近法のもとにとらえ、さらにその見方が俗語にも適用されたときに、当然生まれうる認識であった。だからこそ、同時代のユマニスト、ランディーノは、ラテン語と俗語の発展過程に平行性を見、いまやなすべきは、翻訳と借用を通じて、ラテン語の〈富〉を俗語に同化することであると述べたのである。ラテン語と俗語とは、たがいに否定しあう対立物としてではなく、歴史的競合の関係にあるものとしてとらえられる。清新流派にはじまるトスカナ文学の伝統が、俗語の歴史的正当性を確証するものとして現れるのもこのときである。ロレンツォの言う「われわれの言語」とは、トスカナ語のことであり、俗語一般をさすものではない。だが、1300年代トスカナ文学は、あくまで俗語の成長の出発点としてとらえられているのであって、神話の起源としてたえられているのではない。ここにあるのは、言語の有機的成長にたいする期待と信頼である。他方で、この時代には、なんらかの教義にささえられた画一的な規範は、俗語にあてがわれていなかった。ラテン語要素の混入だけでなく、俗語内部での地域的変異、民衆の言いまわしや隠語にいたるまでの社会的変異は、もしそれが表現として適当なら、なんらとがめだてもなく許容された。その底にあるのは、セグレが〈言語の快樂主義 (edonismo linguistico)〉と名づけた言語意識であるが、それが成立しうるのは、あくまで〈俗衆〉とは切りはなされた平面においてであった。〈俗語 (il volgare)〉は、かならずしも〈俗衆 (volgo)〉の言語のことを意味しなくなってきたのである。

ともあれ、じつは、ロレンツォの言説に調和的にまとめあげられている、ある意味では楽天的とも言えるこうした言語意識は、もはやこれ以後けって成立することがない。それを如実にしめすのが、16世紀にはいってイタリアの知識人のあいだで大論争となった〈言語問題 (questione della lingua)〉なのである。

2

〈言語問題〉とは、ラテン語との対抗関係が弱まりつつあった俗語それ自体に、どのような文化的威信 (dignitas) と統一的規範 (norma) をあてがうべきかという問題を、意識的に論じなくてはならなくなったときに生じた論争であるとと言える。15世紀末からのフィレンツェの急速な政治的、文化的衰退は、

フィレンツェの発展と俗語の成長とを結びつけてながめたロレンツォの希望的観測をうちくだしていたが、そのとき、俗語の規範の規準点を地理的、歴史的、社会的、文体的座標軸のそれぞれどこに見出すべきか、さらに、ダンテ以来の俗語文学伝統にいかなる価値と意味をあたえるべきかという問いが、まさに問題的なものとなってたちあらわれる。おおざっぱに言って、この論争にはつぎの三つの立場がある。

1. 1300年代トスカナ文学語に俗語の唯一の規範をもとめる立場。とくに、ベンボの言語教義。
2. 法王庁あるいは各地の宮廷に成立しているとされる〈宮廷語〉の支持者、ならびに、各地方の俗語の要素からなる混淆文化語の支持者。
3. 同時代のフィレンツェ語の慣用が俗語の規範をつくるとみなすフィレンツェ主義の立場。

たしかに、16世紀初頭において、3の立場はいまだ目立ったものではなかったし、また、1と2の立場のあいだに、明確な境界線をひきうるものではなかった。しかし、あるひとつの書物の出現が、これら3つの立場のあいだの相容れることのできない対立点をうきばりにし、これ以後の〈言語問題〉の論争性の基本的枠組をつくることになる。それが、ピエトロ・ベンボの『俗語について』(1525)である。

ベンボのおもな活動の場はヴェネツィアにあったが、見のがすことのできないのは、アルド・マヌーツィオ書店との結びつきである。ヴェネツィア出版界の中心であったアルド書店は、当初、ギリシャ語、ラテン語古典の刊行に従事していたが、しだいに俗語作品の出版にまで手を広げるようになる。そのなかでもっとも重きをなすのが、ベンボ校訂による『カンツォニエーレ』『神曲』であり、ベンボ自身の『アーゾロの人々』であった。こうして、ベンボは、出版という新たな事業形態とつながりを持ちながら、俗語の領域で、著作活動と文献学的活動を平行しておしすすめたのだが、その目的のひとつは、俗語作品にラテン語のそれと比肩しうる原典的性格を付与することにあった。このことは、ベンボの言語教義を考えるさいに、重要な背景をなしていると言える。

『俗語について』第一書は、ラテン語と俗語との対比から始まる。そこでは、ラテン語はその習得に多くの時間と労苦がひつような疎遠なことばであるが、俗語はすべての者が乳母から学んだ「生まれながら自分自身の」ことばである

とされる。そして、ラテン語がいかに文学的品位をもっているにせよ、作品は自分自身のことばで書くべきであると主張される。このような俗語弁護論は、かつてのブルーニやアルベルティの議論のくりかえしであり、ベンボにあってはそれがすでに紋切型に墮していると言ってもよい。ベンボの目的は、俗語の内部での統一的規範の設定にあったから、このラテン語か俗語かという問いは、主題をひきだすための導入部の役割をはたすにすぎない。じつは、ベンボの言語教義は、この俗語弁護論をうらぎるかたちで提出されることにさえなるのである。

ラテン語対俗語という視点から、ベンボがもっとも重要とみなすのは、ラテン語が比類ない単一性、普遍性をそなえているのに対し、俗語が地域的にあまりに多様なすがたをとるという点である。その多様な俗語のなかからいったいどれを規範として採ればよいのかという点に議論は集中する。そこでまず検討されるのが、当時ローマの文学者のあいだで称揚されていた「宮廷語 (lingua cortigiana)」の概念である。このばあいの「宮廷」は、ローマの法王庁をさし、「宮廷語」とは、イタリア全土さらに外国から法王庁にあつまった教養人のあいだに成立する混淆共通語のことである。だが、ベンボは、この「宮廷語」というものは、法王庁を構成する人間がうつりかわるにつれてすがたをかえるのだから、規範とするにはふさわしくないと言う。そればかりではない。「宮廷語」は〈言語〉とさえ呼びえないのである。「いきあたりばったりになされる会話やおしゃべりは言語ではない。作家をもっていないようなことば(favella)⁽⁴⁾は、ほんとうの意味での言語 (lingua) とは言えないからだ」。

ベンボがもとめる言語規範は、文学伝統に支えられた表現形式をもつことで、時間的変化をこうむらない不動性をそなえていなければならない。それにもっとも適合するのは、フィレンツェのトスカナ語である。ペトルルカとボッカッチョの天才のおかげで、フィレンツェ語は、純粹で (pura)、優美で (vaga)、規則的な (regolata) ことばとなっているからである。ベンボはこう言う。「言語は輝かしく尊ぶべき作家をもてばもつほど、美しくすぐれたものになるのだから、フィレンツェ語が……わたしの俗語のみならず、われわれが知っている他のあらゆる俗語より、はるかに卓越していると断言できる」。⁽⁵⁾

ここで「わたしの俗語」と言われているのは、ヴェネツィア語のことだ。ベンボ自身がなぜヴェネツィア語ではなくトスカナ語で書いたのかと問われて、

ベンボが答えるには、ヴェネツィア語は、トスカナ語作家に比肩しうような作家をもたなかったため、表現性と規則性を欠いており、作品を書くための満足な手段とはなりえないというのである。ベンボは、トスカナ語が「自分自身のことば」でないことを十分意識しつつ、それをしたがるべき俗語の規範としてうちたてようとした。そして、ここにベンボの言語教義のかくれた本質がある。トスカナ語は、言わば〈外国語〉として学ばれ修得されるからこそ、規範的価値を帯びる。なぜなら、ベンボが卓越性をみとめるトスカナ語とは、ペトラルカとボッカッチョに代表される1300年代の文学言語のことであり、同時代のトスカナの慣用とはなんのかかわりもないからである。

トスカナ人はトスカナ語を「なんの苦勞もなくゆりかごと産着のなかで覚える」が、非トスカナ人は「努力に努力をかさねて著作家から学びとる」。だが、まさにこの点で、非トスカナ人はトスカナ人よりも有利な位置にある。なぜなら、トスカナ人は、身のまわりでトスカナ語がたえず話されているため、ものを書くときにも、知らず知らずのうちに「庶民の慣用(popolanesco uso)」にしたがって、不純な要素をまぎれこませてしまうのだが、「すぐれた著述だけから〔トスカナの〕言語を学ぶ」非トスカナ人は、そのような危険からまぬがれているからである。⁽⁶⁾ベンボは言う。「書くための言語は、民衆 (popolo) の言語に近づいてはならない。近づくにしても、荘重さ (gravità) と偉大さ (grandezza) を失わない限りのことである」⁽⁷⁾。

こうして、書きことば、それも美的機能が優越する文学言語と話しことばとのあいだに、侵すことのできない障壁をたてることで、俗語の内部に一種の二層言語状態 (diglossia) を構築することが、ベンボの意図であった。非トスカナ人がトスカナ語に対してとる距離は、〈書〉が〈話〉に対してかならずとらねばならない距離にちょうど適合しているのである。したがって、ベンボは、現実の言語慣用を矯正し純化しようとしたわけではない。むしろ、話す慣用の侵入を許さない超時空的な言語世界を、トスカナ文学伝統のちからをかりて、つくりあげようとしたのだ。ベンボによれば、作家はあらゆる時代と場所を超越した永遠の美的価値を作品にきざみこまねばならず、「現在生きている者が口にし書いていることばよりも、過去のひとびとの作品のことばのほうが、よりすぐれ、より称賛に値する」のであれば、「われわれにしても過去の文体で書かねばならない」⁽⁸⁾のである。

先にふれた俗語弁護論の論拠が完全にくつがえされてしまったことは、もはや明らかだろう。「自分自身のことば」であるはずの俗語が、規範としてもつべきは、書物を通じてのみ学ぶという点ではラテン語と同じ資格をもつ、1300年代トスカナ文学語なのである。こうして、ひとたびはしりぞけられたかに見えたラテン語的モデル、時間的腐蝕をこうむらない不変の規範言語の価値がもどって来たとしても、それはベンボの本意にかなうことであった。なぜなら、ベンボは、ユマニストたちが古典ラテン語作家に対してとった〈模倣(imitatio)〉の原理を、そのまま俗語の圏内でペトルルカとボッカッチョに対して適用することを望んだからである。『俗語について』の刊行以前1512年に、ベンボがジャンフランチェスコ・ピコ・デッラ・ミランドーラ——哲学者ジョヴァンニの甥にあたる——を相手におこなった、〈模倣〉についての論争は、この点を側面照射してくれるだろう。ピコは、〈模倣〉を、発想(inventio)の次元で、さまざまな古典作家たちと対話をかわすことでみずからの創造の道をきりひらくための方法と理解したが、ベンボの把握する〈模倣〉は、あくまで表現法(elocutio)の次元で、もっともすぐれたただひとりの作家——キケロ——を範例として統一的文体をつくりだすという形式主義的原理であった。このときベンボは、のちにエラスムスが批判することになる〈キケロ主義者〉の先頭に立っていた。⁽⁹⁾この論争はラテン語についてのものだったが、ベンボの立場から言えば、おなじ見方が俗語においても優に成り立ちうる。ラテン語におけるウェルギリウスとキケロ、俗語におけるペトルルカとボッカッチョは、それぞれの言語がもっとも純粹であった〈金の時代〉を象徴する〈古典作家〉として、〈模倣〉すべき表現形式の超歴史的範型を与えてくれるのである(ダンテは、そのリアリズムと文体的混淆性のために、この列には序せられない)。俗語の内部で〈古典〉の概念があらわれたのは、まさにこれがはじめてであった。そして、ベンボが数えあげるさまざまな言語の古典的美質は、⁽¹⁰⁾ジェンジーニが言うように、文体的ばかりでなく、イデオロギー的神話であった。それらは、崩壊しつつあったユマニズム的価値観を、俗語の領域で再生させようとした知識人の立場決定を表わす概念なのである。

しかし、理念としての古典主義の伝統が俗語に要求された一方で、言語使用の次元でのラテン語との接触は、むしろ排される。この点で、ベンボは、ラテン語の同化、借用によって俗語を豊かにすべきであると考えた15世紀のユマニ

スト、たとえばランディーノとは逆方向の道をとることになる。⁽¹¹⁾ ベンボにとって、1300年代トスカナ文学語は、いかなる他の要素をも混入すべきでない純粹さと豊かさを示し、それだけで十分に自足した言語世界をつくりうるものであったから、ラテン語法に満ちた15世紀は、俗語の衰退と混濁の時代としてとらえられる。したがって、ベンボの言語教義は、さまざまな混淆折衷主義的試みを許容した15世紀の言語意識にたいする敵対をも表わしているのである。

ともあれ、ベンボによってはじめて俗語の自立性が確立されたと言えるにしても、それは、〈古典〉が支配する画一的規範からの逸脱を禁じた代償としての自立性であった。

3

〈宮廷語〉という概念において重要なのは、トスカナ語の専有的優越性を否定もしくは格下げしようとする契機がそこにふくまれているということである。〈宮廷語〉がイタリア各地の俗語の要素からなる教養人のあいだでの共通語であってみれば、トスカナ語はそれを構成する一地方のことばにすぎないからである。

ベンボがふれていたように、ローマに集まる文学者たちがまず、法王庁に成立する〈宮廷語〉を称揚した。しかし、〈宮廷語〉をより広い視野でとらえたのは、『宮廷人の書』(1528)におけるカスティリオーネである。カスティリオーネが〈宮廷語〉の基盤とみなしたのは、法王庁ではなく、〈宮廷社会〉一般であった。ルネサンスが生みだしたこの〈宮廷社会〉は、後にヨーロッパ全土の貴族社会に影響を及ぼすような、新たな風俗と精神的価値をつくりだしたが、そこにふさわしい言語的理想像が〈宮廷語〉として把握されたのである。だが、カスティリオーネの〈宮廷語〉の概念には、それだけではない社会的背景があった。かれが生まれ育った北イタリアでは、各都市書記局間の交流がすすむにつれ、行政言語において超地方的共通語が形成され、さらにそれが宮廷を基盤とする俗語文学にも浸透していったという事情があるからである。⁽¹²⁾ 〈宮廷語〉を、雅びな宮廷生活の生んだ蜃気楼としてだけ見るならば、その概念の歴史的意味をとらえそこなうおそれがある。

カスティリオーネがまず批判するのは、ペトラルカとボッカッチョの〈模倣〉を絶対的原理と考える復古的トスカナ主義者である。カスティリオーネによれば、〈書〉は〈話〉の写しにすぎず、そのどちらにおいても、言語の本質

的な目的は「理解されること」であるにはかわりがない。そうであるなら、〈模倣〉の原理が依拠するような形式的範型はひつようでない。言語の存立の根拠は、なによりも「慣用 *consuetudine*」に求められる。トスカナ語以外のイタリアの言語の語彙の採用、外国語からの借用、比喩的用法による語義の拡張や造語などは、〈慣用〉が許容するなら、なんらとがめることはない。また、言語はもともと変容性をそなえているのだから、〈慣用〉の変化につれて古いものが新しいものにとってかえられるのは当然のこととなる。⁽¹³⁾「書物から学ぶ」ラテン語とはことなり、「慣用が主人」である俗語においては、生きた慣用にもとづき、「才能と自分自身の自然な判断」にしたがえば、それで充分なのである。⁽¹⁴⁾こうして、「昔の純粋なトスカナの (*pura toscana antica*)」ではなく、⁽¹⁵⁾「豊かで変化に富むイタリア共通の (*italiana, comune, copiosa e varia*)」ことばこそが、カスティリオーネの理想とする言語のすがたとしてうかびあがってくる。

だが、このようにベンボとはまったく対極的な立場からではあるが、カスティリオーネは、現代トスカナ語を規範としてたてることにも断固反対する。『宮廷人の書』の序文で、カスティリオーネは、自分はボッカッチョを模倣したりしないが、さらに、「今日のトスカナのことばの慣用にも服従したくはない」と言う。トスカナ語への盲従は、非トスカナ地域において「慣用そのもののちからを破壊する」ことになるととらえられる。そして、カスティリオーネ自身、「あまりにトスカナ風に話す非トスカナ人」であるより、「ロンバルディア語を話すロンバルディア人」と見られたいと言い、「自分自身の言語で話したり書いたりすることはだれにも禁じられてはいない」と断言するのである。⁽¹⁶⁾

けれども、カスティリオーネの望む〈共通イタリア語〉は、どこの地方にも固有のものとして属さないという点に本質的性格があった。地方的特殊語法を排し、イタリア各地の言語から語彙を選別する「良き慣用」は、〈宮廷社会〉という超地方的空間にしか成立しえないのである。この点で、宮廷の話す慣用のなかに共通語の基盤を見たカスティリオーネとことなり、文学言語だけに視野をしばったことで、かえって整然とした共通語理論を提出しえたのが、トリッシーノである。

トリッシーノの言う〈共通語 *lingua comune*〉とは、イタリア全土の文学者、教養人のあいだでひとしく共通の意味で理解、使用される混淆文化語のことで

あり、それをトリッシーノは〈lingua italiana〉と名づけた。したがって、それは〈イタリア語〉と訳しただけではすまされない意味あいをもっている。〈lingua italiana〉を規範にすべきだという言明は、そのまま、トスカナ語の優位性への異議申し立てとなるからだ。〈言語問題〉の文脈においては、italiano という形容辞自体が、たんなる地理的呼称ではなく、19世紀にいたるまで、toscano, fiorentinoに対立する含意と価値を担うものとして現われる。italianitàとtoscanitàとの対立は、〈言語問題〉を貫く不断の問題系となるのである。

そして、重要なのは、トリッシーノが、〈lingua italiana〉という概念を、未来にむけての計画案としてではなく、俗語文学伝統のなかに実在するものとして、提出したことである。それをトリッシーノはこう論ずる。ダンテとペトラルカの著作に用いられた語彙は、すべてがフィレンツェ語固有のものでなく、シチリア語、ロンバルディア語などそれ以外の要素が多くふくまれている。したがって、「かれらの言語をフィレンツェ語、トスカナ語と名づけることはけっしてできない。かれらの言語には、トスカナ語だけでなくイタリアの他の言語が混ざっており、種が他の種と混じりあえば、類の名称をもってしかまとめて呼ぶことができないのだから、かれらの言語はほかでもない、イタリア語⁽¹⁷⁾ (Italiana) としか名づけることができない」。つまり、ダンテとペトラルカは、トスカナ語ではなく、〈lingua italiana〉で書いた、これがトリッシーノの革命的テーゼなのである。

その論述はやや強引な形式論理性に支配されていたとはいえ、トリッシーノ理論は後世にいたるまで大きな影響力を及ぼした。俗語文学にはその出発点からすでに〈イタリア性〉が刻印されていたという見方をうちだすことで、俗語文学伝統をトスカナの専有物から解放しようという意志が明確に表明されたからである。ユマニズムの枠組に拠らずに、〈イタリア〉という空間形態を知識人の意識対象として設定したところに、トリッシーノ理論の歴史的意味があっ⁽¹⁸⁾た。

そして、トリッシーノは、みずからの理論を支える柱として、ふたつの権威を見出した。ひとつは、ギリシャ古典文学理論である。アリストテレスの『詩学』の発見は、16世紀前半に広汎な文学論争をひきおこす事件であったが、トリッシーノは、その『詩学』にもとづき、ギリシャ文学の様式を俗語文学に移植しようとした。そのとき、ギリシャの方言群の混淆から生まれた共通語、コ

イネーの存在は、<lingua italiana>と類似の現象ととらえられたのである。

だが、より重要なのは、トリッシーノによるダンテの『俗語論』解釈である。『俗語論』は、15世紀にはまったく忘れ去られていたが、トリッシーノは、1515年頃、パドヴァでひとつの写本を発見するや、フィレンツェの文学者たちに紹介し、1529年には自身の俗語訳ともども刊行にこぎつけるのである。トリッシーノにとって、『俗語論』のかけがえのない価値はつぎのことにあった。『俗語論』においてダンテは、イタリア全土に遍在するがそのどこにも局在しない理想的単純実体として<volgare illustre>の概念をつくりあげたが、トリッシーノは、それはまさに混淆共通語としての<lingua italiana>のすがたを指し示していると考えた。トリッシーノ解釈によれば、<volgare illustre>は当時客観的に成立していて、それによって『神曲』が書かれたことになる。また、『俗語論』には、トスカナ語は<volgare illustre>には値しない一地方のことばにすぎないという一節があることも、トリッシーノにとってはまたとない援軍となった。『俗語論』は、トリッシーノ理論の証明物件として現われたのである。

これまではフィレンツェの栄光のしるしとして讃えられてきたダンテが、じつはフィレンツェ語の優位性を否定する立場にあったというのだから、これはフィレンツェの文学者たちにとって衝撃的であった。『俗語論』はダンテ自身の著作ではないと主張する者まで出るほどだった。こうして、『俗語論』に支えられたトリッシーノ理論との対決のなかから、言語的フィレンツェ主義の立場がしだいに鮮明なものとなってくるのである。

4

こうしたトリッシーノ理論を緻密な分析力でもっていちやく批判したのが、『われわれの言語についての叙説と対話』におけるマキャヴェッリである。トリッシーノは、語彙の分類を基準にして、ひとつの地方だけに属する「固有語 (parlare propria)」と他の地方とも共有する「共通語 (parlare comune)」とを区別するが、マキャヴェッリによれば、この区別は相対的なものにすぎない。人間どうしの交流は、言語どうしを接触させ、語彙の借用を必ず生みだす。この意味で、すべての言語は多かれ少なかれ混淆言語となっている。しかし、借用語の存在が言語の同一性を脅かすわけではない。借用語は、その音声と文法の形式を変えられて、当の言語に同化されるからだ。『神曲』に非フィレンツェ

語の語彙が多く用いられているのは確かだが、それらにはフィレンツェ語に固有の形式が与えられている。したがって、『神曲』の言語はフィレンツェ語以外のなものでもない。その一方、トリッシーノが〈lingua italiana〉を構成するとみなした「共通語彙 (vocaboli comuni)」が存在するのは事実であるが、それは、フィレンツェ語作家の著作が各地で読まれ、その語彙が借用されることで、「われわれに固有のもの (proprii) が共通のもの (comuni) となった」からである。それゆえ、「イタリアの共通語とか宮廷語とか呼びうる言語は存在しない。なぜなら、そう呼びうるものはすべて、フィレンツェの作家とフィレンツェの言語からその基礎を得ているからだ」⁽¹⁹⁾。こうして、トリッシーノ理論は、全面的に否定されることとなる。

マキャヴェッリの言語観の核心にあるのは、「人為 (arte) はけっして自然 (natura) に逆らうことができない」という認識である⁽²⁰⁾。それが具体的に意味するのは、言語の存立の根拠にあるのは、話手が生まれ育った社会生活のなかで身につけた話しことば—natura—であり、文学的書きことば—arte—は、その基盤があってこそ成立する二次的派生物にすぎないということだ。言語の同一性を保証する文法形式にしても、arteの産物ではなく、言語のnatura、話しことばの慣用 (uso) そのものに内在するのである。この特定の社会—都市国家—と結びついた〈話〉の慣用を、マキャヴェッリは「祖国の言語lingua patria」と呼ぶ。したがって、マキャヴェッリが、フィレンツェ語の優位性を説くさいにも、文学語のことが念頭におかれているわけではない。フィレンツェ語の〈話〉の慣用それ自体に、他の言語に優越する堅固な形式性、規則性—これをマキャヴェッリは「規律disciplina」と呼ぶ—がそなわっているということだ。フィレンツェは「ほかのどこよりも韻文と散文で書くのに適合しうるように話す祖国」⁽²¹⁾ (傍点引用者) なのである。さらに、マキャヴェッリは、フィレンツェ文学の興隆はダンテやペトラルカの天才のおかげであるとの見方をとらない。その理由はひとえに、「その言語がそうした規律をうけるのに適していた」⁽²²⁾ ことにあるとされる。

こうして、マキャヴェッリは、〈話〉と切り離された文学語の純粹性だけを望むベンボと決定的に対立する。フィレンツェ語の表現性は、けっして書物からだけでは習得できない。それは、現在のフィレンツェで話される生きた慣用を通じて身につけるほかはない、とマキャヴェッリは考えるのである。「より

高い価値をもつあの言語〔フィレンツェ語〕に固有で独特のものを理解せずには、りっぱに書くことができない。その固有なものを手にしよとすなら、その言語が生まれたみなもとに赴かねばならない⁽²³⁾。言語における〈話〉の本質性という把握と、フィレンツェ語の自然的優越性という主張とは、たがいがたがいを前提としており、切り離すことのできない関係にあるわけである。

このマキャヴェッリの『叙説と対話』にはかくれた政治性がある。「祖国の言語」の概念は、それを端的に表わしている。「わたしの祖国」フィレンツェにたいする熱烈な献身と讃美を語ることではじまるこの言語論の真の目的は、共通語とされているものがフィレンツェ語にはかならないことを証明することで、イタリア全土が「われわれの祖国からうけとった恩恵⁽²⁴⁾」を知らしめることにあった。つまり、イタリア統合におけるフィレンツェの中心性を歴史的に再確認するという作業の一環なのである。そして、その文学が表わすフィレンツェ語の「尊厳 dignità」は、市民が話す慣用の「規律 disciplina」によって支えられているという把握は、十分な政治的比喻として成り立ちうるのである。しかし、このような意味での政治性は、やはりマキャヴェッリ独自のものであり、後にひきつがれることはなかった。

フィレンツェ主義はその後、1541年にコジモ・デ・メディチによって設立されたフィレンツェ・アカデミーにその活動の場を見出す。初期のフィレンツェ主義は、ユマニスム文化の枠組に拘束されない俗語文献学の研究をおしすすめ、そのなかでもダンテ研究は著しい進展を示した。ダンテがフィレンツェ文化の栄光の象徴としてとらえられたのは言うまでもないが、それはけっして復古主義的性格のものではなかった。ダンテの著作は、フィレンツェ語の豊かさを再確認させることで、現代慣用の顕揚の支えとなりえたし、また、俗語の使用領域を文学以外の知的活動にまで拡大すべきだとの視点から、『神曲』があらゆる知識を包括する百科全書的性格をもつことが注目されたのである。だから、ダンテは、〈模倣〉すべき古典作家として登場したのではない。じじつ、ベンボ的な〈模倣〉の原理は、ダンテを過小評価したこともあり、反感をもってしか迎えられなかった。ダンテ研究家ジェッリは、「ひとが学識豊かになるのは、〔理解した〕事物によるのであって、言語によるのではない⁽²⁶⁾」と述べたが、このことばは、eloquenzaを人間形成の至高の価値とみなすユマニスムからの脱却の志向を表わしている。さらに、フィレンツェ主義の底流には、トラ

バルツァのことばを借りれば、「反文法的プーリズモ⁽²⁷⁾」とも言うべき傾向があった。文法に自立的価値はなく、生きた慣用はけっして十全に規則化されえず、書物からだけで学んだことばは不完全であり、文学の言語はあくまで二次的なものだ等々の主張が、言語の natura=uso=popolo の等値関係をもとに、そのときどきに表明された。もちろん、それは、フィレンツェ語慣用の優秀性を確信する意識にうらうちされていたことは言うまでもない。

けれども、反宗教改革体制のもと、文化的活力が衰えるとともに、フィレンツェ主義はある種の変質を示すようになる。話す慣用が言語にとって本質的であることを認めるにしても、その言語を高貴に豊かにするのは、やはり文学者の手によるしかないという観点が強調されてくる。たとえば、ヴァルキは、慣用から身につけられる話しことば (lingua) と、文学的目的のための書きことば (stile) とを厳密に区別し、前者はフィレンツェの口語慣用を、後者は古典作家の文学語を規範にすべきであると主張した⁽²⁸⁾。そのとき、stileの次元では、〈古典〉の〈模倣〉というベンボの教義も正当化されることになる。その一方で、1300年代への懐古的まなざしが、これまでの言語自然主義と奇妙なかたちで結合してくる。ボルギーニは、その歴史文献学の研究を通じて、1300年代トスカナ語こそ純粋で完璧なことばであるとの結論にたどりつくが、それは、「その時代には、教養ある者の慣用からかけはなれた無知で素朴な人間、村々の農民でさえ、まったく純粋に甘美に話した⁽²⁹⁾」からなのである。言語の natura は、1300年代トスカナにおいて十全に開花し、それ以後衰退にむかうという図式が、ここに現われてくる。

こうして、フィレンツェ主義が守旧化し、復古主義的性格をつよめるにしたがい、〈模倣〉と1300年代神話にもとづくベンボの教義との歩みよりを見せるようになる。それを完全になしとげたのが、クルスカ・アカデミーの創設者のひとり、サルヴィアーティである。サルヴィアーティの根本的認識は、「われわれの俗語の規則は、われわれのかつての作家、つまり、1300年から1400年までに書いた作家からとるべきである。なぜなら、それ以前はことばがそのもっとも美しい花のさかりにいまだ達していなかったし、それ以後は疑いもなく花がしぼみはじめるからだ⁽³⁰⁾」という言明に表わされている。1300年代トスカナ語は、言語がもっとも純粋であった〈黄金時代〉となり、言語がすでに衰退したいまとなつては、その純粋性をとりもどすために、たえずそこにたちか

えらねばならないのである。けれども、ベンボとことなり、言語の純粋性は、すぐれた文学者が与えたものとは見なされない。サルヴィアーティは、「その純粋さは、作家と同じくらい、あるいはそれ以上に、民衆の声 (voce del Popolo) のなかにあった。なぜなら、民衆はその純粋な声であるがまさに (naturalmente) 話していたからだ」と言う。1300年代トスカナでは、文学以前の言語それ自体が、あらゆる話手において、純粋性を顕示していたということになる。したがって、この神話化は全面的である。文学表現においては、ペトルカとボッカッチョに代表される古典作家が不動の範型となったことは言うまでもないが、1300年代トスカナのものであれば、文学性の有無、ジャンルのちがいを問わず、商人の年代記や会計簿にいたるまでのあらゆる文献が、言語的崇拜の対象となるのである。⁽³¹⁾

このようなサルヴィアーティの理念にもとづいて、クルスカ・アカデミーが成立し(1583)、『クルスカ辞典』が編纂刊行される(1612)のだが、そこまで追いかけるのは、いまはやめておく。だが、クルスカ・アカデミーが〈言語問題〉を解決したと言えるとしても、それは解決ならざる解決、イタリア語を「死語」にすることによって得られた解決にすぎないということである。⁽³²⁾

5

以上が、16世紀の〈言語問題〉の概括である。それでは、わたしたちはそこからなにをとりだすべきだろうか。

〈言語問題〉は、ラテン語からの俗語の自立、そして俗語内部での規範設定をめぐる近代最初の論争としてとらえれば、これ以後のヨーロッパ地域、さらには非ヨーロッパ地域までその射程に入ってくるような一般的広がりをもった事件であると言える。直接の影響関係が重要な⁽³⁴⁾のではない。近代国民語の形成のさいに「広汎にくりかえされる議論と主題」を明示的、包括的に提示することによって、〈言語問題〉は基本的パターンの母体をつくりえている。だが、これは、イタリアの時間的先行性によるのではないし、〈言語問題〉が普遍的に妥当する類型性をしめすということでもない。明確な立場決定が要求される論争のなかで、さまざまな規範意識が、つねに対立項を前提とする言説によってあらわにされている。〈言語問題〉は、〈自己記述〉による規範化をめざす〈メタ言語〉の集合体という点で、徴候的な例たりえているのである。⁽³⁵⁾

しかし、この面では、〈言語問題〉はイタリア特殊の問題である。イタリア

の多言語性、文化の多中心性は、この場合、背景をつくるにすぎない。16世紀だけでなく、〈言語問題〉は、その時代の政治的危機への微妙な反応としてある。政治的分裂状態のなかで、いかなる統一的な文学語をもつべきかという問いこそ、〈言語問題〉のかけた政治的次元をつくる。したがって、グラムシが、〈言語問題〉を〈知識人問題〉に読みかえ、さまざまな知識人グループによる文化的ヘゲモニーをめぐる闘争をそこに見出したのは、きわめて正確な把握であった。⁽³⁶⁾

そして、この特異性においてこそ、〈言語問題〉がわたしたちにつきつける問いがある。和解しがたい言語的立場が対立しあい、みずからの言語の名称すらが論議の対象となる〈言語問題〉は、言語の〈社会的表象〉の生産過程の断面図をしめしている。⁽³⁷⁾ 等質的な〈表象〉の確立にひつような、知識人によるメタ記述の視点の統一化すら、幸か不幸か、そこには存在しない。これを逆に言えば、ある言語が自明で等質的な〈社会的表象〉として成立しうるためには、ある社会集団による言語の占有を通じて、いかに多くの言語意識の分裂が回避され、いかに多くの歴史的忘却と隠蔽がつかさねられねばならないか、ということである。わたしたちは、みずからの〈言語問題〉を想像する、あるいは歴史的にほりおこすことで、慣れ親しんだ自明性にひとつのくさびをうちこむことができるかもしれない。

(注)

- (1) Vitale, M., *Questione della lingua*, Palermo, 1978², p. 628-630 ; Grayson, C., *Lorenzo, Machiavelli and the Italian Language*, in Jacob E. F. (ed.), *Italian Renaissance Studies*, London, 1960, p. 410-432も参照。
- (2) Segre, C., *Lingua, stile e società*, Milano, 1963
- (3) Bembo, P., *Prose della volgar lingua*, a. c. di M. Marti, Padova, 1967, p. 7-11.
- (4) *ibid.* p. 31
- (5) *ibid.* p. 34
- (6) *ibid.* p. 35
- (7) *ibid.* p. 38
- (8) *ibid.* p. 41
- (9) Cf. Gambaro, A., Introduzione di Erasmo, *Il Ciceroniano*, Brescia, 1965

- (10) Gensini, S. (cur.), *Lingua e dialetti nella cultura italiana da Dante a Gramsci*, Firenze, 1980, p. 37
- (11) Dionisotti, C., *Geografia e storia della letteratura italiana*, Torino, 1971, p. 168
- (12) Durante, M., *Dal latino all'italiano moderno*, Bologna, 1981, p. 149-158
- (13) Castiglione, B., *Il libro del Cortegiano*, note di N. Longo, Milano, 1981, p. 65-76
- (14) *ibid.* p. 79-80
- (15) *ibid.* p. 76
- (16) *ibid.* p. 6-10
- (17) Vitale, M., *op. cit.*, p. 638-639
- (18) 新しい知識人のタイプとしての〈italianisti〉については, Mazzacurati, G., *Conflitti di culture nel Cinquecento*, Napoli, 1977, cap. VII.
- (19) Machiavelli, N., *Discorso o dialogo intorno alla nostra lingua*, a. c. di B. T. Sozzi, Torino, 1976, p. 25
- (20) *ibid.* p. 18
- (21) *ibid.* p. 24
- (22) *ibid.* p. 25
- (23) *ibid.* p. 24 これはある意味で後のマンゾーニ主義を予告するものである。じじつ、マンゾーニは、このマキャヴェッリの言語論のなかに有力な理論的支えを見出し、その分だけダンテの『俗語論』は重みを失う。〈言語問題〉のなかで、『俗語論』と『叙説と対話』の解釈と評価は二者択一の関係をなし、立場決定の試金石となる。
- (24) *ibid.* p. 26
- (25) Cf. Mazzacurati, G., *La questione della lingua dal Bembo all'Accademia fiorentina*, Napoli, 1965, cap. V.
- (26) Vitale, M., *op. cit.*, p. 86
- (27) Trabalza, C., *Storia della grammatica italiana* (1908), Bologna, 1984, p. 221
- (28) Vitale, M., *op. cit.* p. 90-91
- (29) Pozzi, M., *Lingua e cultura del Cinquecento*, Padova, 1975, p. 185-186 に引用。
- (30) Vitale, M., *op. cit.* p. 657
- (31) *ibid.* p. 659
- (32) この点で、おなじ言語統制機関とは言っても、クルスカ・アカデミーとアカデミー・フランセーズとは、その理念において大きなちがいをもち、後者が、その出発点において、言語規範とみなしたのは、宮廷の会話と同時代のすぐれた作家たちであった。ルイ14世治下の作家が、真の意味での〈古典〉となるのは、18世紀に入ってからである。ただし、その場合でも、言語の純粋性は作家がつくるものとされたことにはかわりがない。ルイ14世治下の言語そのものが純粋であった

などという途方もない考えは、生まれようがなかった。

- ③③ イタリア語が「死語 *la lingua morta*」であるとは、マンゾーニにいたるまで、反クルスカの立場にたつ多くの作家がくりかえし述べたところである。
- ③④ Scaglione, A. (ed.), *Emergence of National Languages*, Ravenna, 1984, p. 19
- ③⑤ 文化の規範化のための〈メタ言語〉の役割については、Lotman, J., *Testo e contesto*, Bari, 1980
- ③⑥ Lo Piparo, F., *Lingua, intellettuali, egemonia in Gramsci*, Bari, 1979
- ③⑦ 〈表象 *representation*〉という概念で、ここで参照すべきは、ブルデュの考察である。Bourdieu, P., *Le sens pratique*, Paris, 1980; *ib.*, *Ce que parler veut dire*, Paris, 1982

(筆者の住所：千葉県我孫子市白山2-13-13)